
同窓会

出口 常葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会

【Nコード】

N0077H

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

廃校になる高校で久しぶりに集まる同窓生たち。その中には幼馴染の三人もいた。

(前書き)

何となく書いてみた一本。

やがて人は別々の道を歩き出すんだろくな、
というのは常々思っていることで、それを書いてみた。

「朱里、俺、お前のことが……」

「ごめんね、雄一君」

全てを言う前に、朱里は雄一に向かって頭を深々と下げた。

「私の寄り添いたい人はね、西の空にあっても、まだ輝いているような人なの」

そう言っ、朱里はその白い指を斜め上に突き上げて見せた。

そうして、雄一の恋は儚く散った。

十七歳。暑い夏のある日の出来事だった。

いよいよ廃校になるので、最後に思い出の学び舎で同窓会を。

そんな企画を月潟雄一が持ちかけてきたのは、年が明けてすぐだった。僕は一も二もなく飛びついた。

バスも一時間に一本しか走らないような田舎の町で僕たちは育った。町で一軒だけあった高校も一学年一クラスだけ。殆どの生徒は、中学を卒業と同時に町を出ていってしまう。地元の高校に通うやっなんて、ほんの一握りだったのだ。

それだけに、つながりは強かったように思う。

と言っても、大学に進んだり、就職はさすがに都会に出たりで、結局高校を出ると殆どの連中は町からいなくなった。

僕と雄一と、それに星岡朱里は家も近所の幼馴染だった。三人仲良く地元の高校に進んだまでは良かったが、結局朱里も雄一も大学に進むために町から出て行った。僕だけが残っていた。

廃校になる、と聞いたときには本当に残念だった。

何かやろうと、本当は僕が言いたかった。けど、言い出せなかった。町を出て行った連中が集まってくれるんだろうか。それが心配で勇気が出なかった。

雄一が高校にまだ思いを寄せていてくれたのは本当に嬉しかった

し、心強かった。何より、持ちかける相手に僕を選んでくれたのが嬉しかった。いつの間にか連絡を取り合わなくなっていたけど、話してみるとすぐに昔に戻れたような気がした。

それから僕は電話を掛け捲った。もちろん朱里にも。朱里は、二つ返事で了解してくれた。

当日はすぐにやってきた。

夏のある休日。午後四時。校舎を使える時間が限られたため、少し早い時間から始めると雄一は言っていた。

当時僕たちが使っていた教室には、二十人ほどが集まった。

当時、僕達のクラスは全員で二十五人ほどだったから、かなりの数が集まれたと言うことになる。みんな電話をかけるとこの企画に飛びついてくれたのだ。

朱里も、びっくりするぐらいあか抜けた美人になっていた。

「久しぶりだね、元気だった？」

「まあね、朱里も元気そうだね」

「うん、久しぶりに君に会えるからかな？」

そう言って微笑んだ朱里は、随分と綺麗になっていた。話を聞けばモデルをやっているという。綺麗なわけだ。

「そのうち、雑誌の表紙を飾るわ」

「はは、楽しみにしているよ」

暫く話をしていただけ、昔と違ってどこかギクシャクしていた。

幹事の雄一が簡単に挨拶を済ませて、いよいよ同窓会が始まる。

長い間会っていなかった連中だから、積もる話はいくらでもあった。時間が無限にあればいいのに、と本気で思ったぐらいだ。

「結構集まったな」

すっかりスーツ姿の馴染んだ雄一が、一通り話を済ませて落ち着いた僕に話しかけてきた。

「うん、ほっとしたよ。しかし、みんな変わったね。なんだか僕一

人だけ田舎臭くて恥ずかしいよ」

「まあ、十年以上経ってるからな。俺は、まだお前がこの町にいて驚いたよ。何してるんだ？」

いつの間にか疎遠になっていた幼馴染は、僕の近況さえ知らない。もつとも、それは僕も同じだけど。

「今は大垣食堂でコック」

「大垣食堂？あの潰れかけの？」

「外装が古臭いだけだよ。今潰れられたら僕はフリーターに逆戻りだ」

大垣食堂は僕たちが高校に通っていた時分から、商店街では古株の店だった。何代にも渡る常連さんのおかげで、ある意味、この町で一番安定した職業ともいえる。

「へー、で、独身なのか？」

「うん、まあ近々そうじゃなくなるけど」

「……結婚するのか？」

「うん、マチを覚えてる？」

「ああ、あのちんくしゃ……っておい、まさか」

雄一が驚くのも無理はない。僕たちが高校生るとき、大垣食堂の一人娘のマチはまだランドセルを背負っていた。僕たちが卒業するときに、ようやく中学生になったのだ。

「けど、今になってみれば二十九歳と二十三歳だよ」

「まあ、確かにそうだけどなあ」

「三十までには身を固めろって、親も煩くてね」

「だからって、まさかマチとはなあ」

雄一にはよっぽど驚きだったらしい。しきりに首を傾げていた。もう一緒に暮らしているといったら、もっと驚くだろう。

「あれ、じゃあ倉田は？」

「う、知ってたのか……」

痛いところを持ち出された。

倉田真由美。僕が高校時代に好きだった女子だ。今は結婚してアメ

リカに住んでいるとかで今日は来ていない。こなくてほっとしたと言うのは正直なところ。何しろ、卒業式の日振られた相手なのだから。

「振られたよ。あっさりだね」

「……そうなのか。それでその後は？」

「そりゃ、悲しくてね。家に帰って泣いたよ」

「……俺が聞きたいのはそういう事じゃないんだがな」

「うん？」

雄一の言わんとすることが分からなくて、僕は首をかしげた。

「……ちよっと、外に出ないか？」

「え、良いのか？ 幹事だろ？」

「構うもんか、みんな話しに夢中だよ。俺は一服したいんだ」

そう言っスーツの胸ポケットから雄一は煙草を取り出した。確かに、この年になっても教室で煙草を吸うというのはなんだか不味い気がする。三つ子の魂なんとやらだ。

グラウンドに出ると、そろそろ西に傾き始めた太陽が赤い輝きを落とし始めていた。

「かわんねえな、このグラウンドも」

そう言いながら、雄一は置きっぱなしになっていた朝礼台に腰掛けて煙草を一本口にくわえた。ライターで火をつけると、煙がゆっくりと立ち上る。

「そうだね」

僕は頷いた。狭いグラウンドを見回してみると、どれも僕が知っているときより年季が入っているが、何一つ場所は変わっちゃいなかった。

「覚えてるか、日時計」

「懐かしいね」

僕たち二人の暇つぶし。

高校時代の校長はとにかく話が長かった。

その退屈しのぎに、日時計で時間を測ると言い出したのが雄一だった。針は背の高い銀杏の古木。高校の敷地内に生えていた木の中でも古株の木だった。

「鉄棒から始まるんだっけ？」

「そう。鉄棒が九時だ。体育倉庫に影がたどり着いたら三十分だったな」

「僕たちのところに影が届くのは夕方だっけ？」

等々丸一日を細かく計りだしたところで、僕たちはこの遊びに飽きてやめた。

何かの拍子に朱里に話をしたら、面白いねといって細かく計るのに付き合ってくれたのは覚えている。

「調度今ぐらいだな。だから、あの影の辺りに俺たちは立っていたんだ」

そう言って朝礼台から雄一が指差すところに、僕は立ってみた。

あの頃とそんなに背丈は変わっていない。残念ながら僕らの伸び盛りは高校のときに終わってしまったらしい。だから、今見る景色は高校のときと余り変わらない目線。ただ、あのときには前にも横にも他の生徒がいた。ひとりっきりで立つことなんてなかったから、その景色は随分新鮮に見えた。

「西の空にあって、まだ輝くものってなんだと思う」

「何それ？」

「まあ、なぞなぞだな」

「ふーん」

西の空にあって、まだ輝くもの。

気がつけば僕も雄一も真っ赤に染まっている。

「そうか、あれだよ」

僕は西の空に赤く輝く太陽を指差した。

「正解だ」

「で、それがどうかしたの？」

「俺が振られたときに言われた言葉だ」

「誰に？」

「朱里」

事も無げにそう言った雄一の言葉に、僕は驚いて何も言えなかった。

「驚いてるな」

「う、うん」

「まあ、言わなかったのは悪いと思ってるよ。何となく、幼馴染三人の関係をぶっ壊すようだな。おまえにや言えなかった」

そう言って、雄一は深く吸った煙を吐き出した。

「そっか。何で今？」

「ん、まあ、お前が朱里じゃないやつと結婚するって聞いたからかな」

「何でそこで朱里が出てくるのさ？」

雄一の言いたいことが分からず、僕は少し苛立っているのが自分でも分かった。

「だから、西の空にあって尚輝くもの、だろ？日野陽二君」

火の付いたタバコで指されても、まだ僕は意味を掴みかけていた。

「つまり、当時の朱里の心はお前に向いていたって事だろう？案外自分を宵の明星に重ねていたんじゃないか？あいつも星だからな」

「ああ」

なるほど。ようやく僕は理解した。

「結局、あいつも何も言わなかったって事だな」

「そうみたいだね。僕はちっとも気づいていなかった」

「まあ、あのときのお前は倉田一筋だったからな。あいつも、幼馴染の仲をこれ以上壊したくなかったのかもな」

「けど、現実にはばらばらだ」

「うん、たまに思うな。あの時、もっと話をしていればどうなっていたのかってな」

雄一はそう言って、随分と短くなった煙草をすった。それにあわせて先端の火が明るい輝きを見せる。

「そうだね」

僕はただそう言った。日はそろそろ落ち始めていた。

「ちよつと、幹事がいなくなるってどういうことよー」

校舎のほうから朱里の怒鳴り声が聞こえてきた。

「おっと、長話が過ぎたか」

雄一は、朝礼台の端で無造作に煙草を消した。それを見て、僕は何となく寂しかった。

「今戻るよ」

「お酒が足りないってー。おつまみも」

「やれやれ、どれだけ飲むつもりだ」

ため息をつく雄一に、僕は手を差し出した。

「買ってくるよ。僕が行くのが手っ取り早いだろう？」

「今となつちやそうだな。悪いが適当に頼む」

そう言つて、雄一は懐の財布から一万円札を何枚か取り出して僕に差し出した。僕はそれを受け取り、雄一に背を向けて歩き出す。

雄一もまた、校舎のほうに歩いていった。

夜道を歩きながら僕は雄一の言葉を思い返す。

「あの時もつと話していたらどうなっていたのかってな」

もちろん、今と何も変わっちゃいないだろう。たまたま、同じところに暫くいただけなのだ、きっと。

明け方の空に月と星が見えていて、東の空から太陽が出始め、月と星と太陽が同じ空に見えることがある。でも、月と星と太陽は、実際のところばらばらの場所にある。それがたまたま同じタイミングで見えただけ。僕たちがこの町で過ごしたのは、きっとそんな時間なのだと、今は確信していた。

ポケットから携帯電話を取り出し、僕はマチに電話をかけた。
「やあ、僕だよ。うん、思っていたより早く帰れそうだよ……」

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077h/>

同窓会

2010年10月8日15時44分発行